

令和7年度第1回(第38期)浜松市社会教育委員会会議録

1 開催日時 令和7年7月8日(火) 午前10時から11時45分

2 開催場所 浜松市役所本館8階 802会議室

3 出席状況
 委員 山本巖委員長、谷口卓副委員長、久保賢治委員、
 飛田ひさ子委員、石田みゆき委員、鈴木英之委員、
 松井里華委員、内藤明子委員、李受眞委員、澤根緑委員
 事務局 野秋教育長、嶋野文化振興担当部長、加藤生涯学習担当
 課長、天野生涯学習推進グループ長、袴田指導主事、
 鈴木主任、田辺主任、新林

4 傍聴者 1人(一般:0人、記者:1人)

5 議事内容
 1. 第38期浜松市社会教育委員会の活動
 2. 本市の生涯学習事業における実績及び計画
 3. 生涯学習推進大綱の改定について

6 会議録作成者 創造都市・文化振興課生涯学習推進グループ
 袴田指導主事、新林

7 記録の方法 発言者の要点記録
 録音の有無 無

8 会議記録

- 1 開会
- 2 委員委嘱
- 3 教育長挨拶
- 4 部長挨拶、職員紹介
- 5 正・副委員の選出
- 6 議事

(1) 第38期浜松市社会教育委員会の活動について

■事務局から、第38期社会教育委員の活動内容、スケジュールについて説明

(2) 本市の生涯学習事業における実績及び計画について

■事務局から、本市の生涯学習事業における実績及び計画について報告

■意見・質疑応答なし

(3) 生涯学習推進大綱の改定について

■事務局から、生涯学習推進大綱の改定について説明

■意見・感想・質疑応答

谷口副委員長：

大綱の素案に、「生涯学習は自発的意思に基づいて」とあるが、学校教育ではよく主体的という言葉を用いている。生涯学習において、自発的という語句を用いるのは何か意図があつてのことか。

事務局：

生涯学習に関係する法律等に自発的という記載があり、それを参考にしたものである。

谷口副委員長：

素案の中に「学びを通じた人とのつながり」に関する記述が数か所あるが、「学びを通じた」と書かれている箇所もあった。これは意図的なものか。

事務局：

言葉にぶれがあるため、統一していく。

飛田委員：

年々、協働センターで実施される講座の内容に文化的なものが増え、講座の質が上がっていると感じる。自分自身が社会教育委員になったことで、協働センター等で実施している講座への意識が高まったこともあるが、協働センターの講座の内容が多様化しており、各地域において独自性が出てきているのではないか。

素案では、人材の育成に関して、地域人材を発掘、育成するとあつた。これは理想的でとてもいいと思うが、現実には、ボランティア等の発掘・育成、特にボランティアにおけるリーダーの発掘・育成は難しい問題だと感じている。生涯学習における地域人材の発掘や育成について現状はどうなっているのか教えてほしい。

事務局：

地域における学習の担い手の発掘・育成に関しては、当課の事業に学習成果活用事業というものがある。これは、自身が学習してきたことを活用する機会として地域で生涯学習講座の講師をしたいという人をサポートする事業である。年度当初に募集を実施し、例年約 80 件程度の応募がある。協働センター等の生涯学習施設が

窓口になっている。昨年度、ある議員から、子育てが終わった年代の方等、生涯学習の講師をやりたいというニーズはあるが、学習成果活用事業が知られていないという意見があった。この事業の課題に市民への周知不足があるため、従来の「広報はままつ」に加え、今年度からSNSなどでの情報発信も始めたところである。

また、各地域におけるボランティア人材の発掘・育成に関しては、従事者の高齢化と担い手の発掘・育成が課題になっている。当課でもボランティア人材の発掘・育成のための講座を実施しているが、特に発掘というところでは難しさを感じている。昨年度の社会教育委員会のなかでも話が出たが、協力者を増やすには口コミでの呼びかけ、つまり信頼している人から誘われることが効果的と思われる。人伝いでつながりをつくっていくということが大切になってくる。一方で、やはり市域に向け広く周知をすることも重要であるため、引き続き「広報はままつ」などの紙媒体とインターネットやSNS等の周知を組み合わせ、周知をしていきたい。

飛田委員：

ボランティアという言葉だと敷居が高いと感じられるため、私は地域貢献という言葉を使っている。何か地域の役に立ちたい、地域貢献したいという思いがある方も多いのではないかな。私の活動では、地域貢献できないかとお誘いする際、長時間ではなくても、短い時間でも構わないとしており、現在は仲間が20名程になった。たとえ月に短い時間でも、行動することで意識が変わり、次の行動につながるのではないかな。「地域貢献しませんか」という言い方にこの頃すごく手応えを感じている。浜松には素晴らしい人材が多くいると思うので、ぜひ発掘・育成に結びつけてほしい。

鈴木委員：

大綱はどのような形で公表されるのか。

事務局：

主にはインターネット上に公開していく。各協働センター・ふれあいセンター・支所等には印刷物を配付する予定である。

鈴木委員：

素案は文字が多いため、市民からは読みにくいと敬遠されてしまうのではないかな。図や表など一目でわかるような形も必要ではないかな。

澤根委員：

まだ案の段階ではあるが素晴らしいものができてきていると感じた。また、前回の会議を受けて、標題に浜松が入り、とてもよいものになった。

私は学校運営協議会の委員をしている。学校・家庭・地域が連携・協働し、地域にある様々な学びの機会や情報を子どもたちに提供し、地域全体で子どもたちの成

長を支えていきたいと思っている。浜松には、将来を担う子どもたちがたくさんいるので、その子どもたちが立派に育っていくことをサポートしたい。

生涯学習は難しい言葉であるが、子どもでも大人でも、いつからでも学びを始めても大丈夫というということが分かると前向きになれると思う。忙しくても、時間は自分でつくるものなので、学びに関する多様な情報を入手できれば、「こんなことができるのか、やってみたい」と思えるきっかけとなるのではないかな。この大綱の改定をきっかけに、生涯学習について改めて知ってもらうことで、活気あふれるまちになっていくと思う。パブリックコメントにも期待している。

内藤委員：

今まで浜松市に生涯学習推進大綱というものがあることを知らなかった。市民のほとんどの方は、知らないのではないかな。いかに周知していくかが大切だと思う。

本日は各地域の施設ごとに特色ある活動をしていることがよく分かった。各地域の好事例を横展開していく仕組みが必要だと感じた。

久保委員：

生涯学習事業の実績及び計画の中にあつたように、子どもから大人までとうたわれているが、実際には子どもは小学生を対象としたものが多く、中学生、高校生が対象となっていないものが多い。先ほどの実践報告で「中学生リーダーカレッジ」の取組が紹介されていたが、非常によい取り組みであるため、他地域でも同様の取組があればと思う。引佐地区の校長会で引佐支所から夏休みのイベントの紹介があったが、小学生を対象としたもののみで、中学生のものはなかった。中学1年生の中には、前年までイベントに参加している生徒もいるため、中学生も手伝いに来てもらいたいと言ってもらえると、中学生が小学生の面倒を見る、その子たちがまた中学生に上がってくるといふ、つながりができるのではと感じた。

いつでも学べる機会がある、いくつになっても学べるというところは、とても大切だと思う。小学校、中学校の教育現場が学びを育むことはとても重要だと思う。子育て世代が学ぶ機会、子育てが終わってから学ぶ機会、退職後時間が生まれて学ぶ機会など、それぞれの段階で幅広く計画していると思うので、そこは周知していくことが大事だと思う。

自分としては、地域を知るといふことを小・中学校の段階でやっておくことが大切だと思う。引佐地区は伝統芸能がたくさんあるため、総合的な学習の時間で学んだり、学校運営協議会等の地域の方々の協力を得たりしながら活動しており、先日も地域の方を呼んで語り部の会を行い、本日、静岡新聞に掲載された。世界に活躍する人材が浜松から出ればよいと思うが、地域のよさを子どもたちが知り、地域を離れても地域のことが好きで、里帰りのときは子連れでお祭りに行ったりするような、そういう学習が進められればと考えている。ここで学んだことを地域や学校に還元していきながら、自分の学校だけでなく、他の小・中学校の校長にも伝えながら進めていきたい。

素案について、1 ページに書いてある内容のほとんどは経過報告であるため、「はじめに」とすると少し違和感を覚える。また、「はじめに」という表題とするならば、「おわりに」というページも必要になるのではないか。

4 ページのアンケートから、現状と課題について、中高生の意見はあるのかと思う。現在、中学生が参加できる講座が少ないが、これは休日に部活動があったため講座を開設しても参加者が見込めなかったことが要因にあると思う。しかし、現状、部活動に入らない子どもたちが年々増えており、さらに今後、部活動が地域展開されていくと、その子どもたちがやりたいこと、スポーツだけでなく、文化的なことにも受け皿となる機会や場所があれば、子どもたちはそこで自分がやりたいことや楽しいことを見つけ、それが自分の学び、生涯学習につながっていくと思うし、それがまた地域でのつながりになるものと思うので、中高生の意見も今後検討してもらえればと思う。今後、蒲協働センターの例等を生かし、中学生を対象とした講座の検討や、湖南高校の例にもあったように、高校生とのつながりを深めていくということも、高校を卒業してから地域に戻ってくることのヒントになるのではないか。

また、素案に示されているアンケート調査からの内容だけでは、山間地域の抱える問題がわかりにくいと感じた。年齢構成についても 18 歳以上と書いてあるが、子育て世代の意見や世代ごとの割合が見えにくく、それが課題につながってくるのではと思う。

石田委員：

現在、地域の団体である与進の会の代表として長上協働センターと連携し、子ども講座等の企画や、中学校でのボランティアの活動をしている。また、学校支援コーディネーターとして、小学校で地域と学校をつなぐ役割を担っている。生涯学習推進大綱から、自分たちの活動がどのように関わっているかよくわかった。

その大綱について質問がある。この大綱は誰に向けてつくられるのか。一般市民に向けてつくるものならば、素案の内容は難しいと感じる方が多くなるのではないだろうか。一方で、概要版ならば一市民も理解しやすく、さらに、この大綱は学校や地域の子どもたちにも関係するものとわかれば、目を通す方が増えるのではないか。また、生涯学習は子どもから高齢者までが対象となるため、それぞれに応じた見せ方が必要ではないか。

かつて生涯学習ボランティア制度であったころには、グループでしかボランティア登録できなかったが、現制度の地域学校協働活動ボランティア制度では、個人で参加できるようになった点はメリットが大きいと感じている。しかし、市民への周知が不十分と感じていることと、各施設によっては、十分な活用ができていないことは課題だと思う。また、ボランティアに関して、活動のなかでボランティアの役割や立ち位置などがもう少し明確になると一般の人も、ボランティアへ参加しやすくなるのではないか。先ほど地域貢献という言葉が飛田委員からあったが、学校支援コーディネーターとして、企業や団体に学校支援活動の依頼をする際に、私も地

域貢献の一環として依頼している。企業も地域の一員として地域貢献を重視する企業が増えており、地域の子どもたちのために快く依頼を引き受けてくれている。

李委員：

昨年度から議論を積み重ねてきた大綱が、今回の素案のような形になったことに感謝する。

先ほども指摘のあったように、大綱は誰が見るのかというところは、これまでの会議においても明確になっておらず、ここを明確にする必要があると感じている。

また、20代、30代の若者世代をいかに協働センターの取組に巻き込んでいけるかが課題と感じている。一部の大学生はボランティアとして協働センター等の取組に参加しているが、20代～30代など仕事に専念している年代については、情報すらも目にする機会はないのではないかと。一部の方は、地域の回覧板などで協働センターの刊行物やマンション等においては、掲示板等で見かけることはあるかもしれないが、講座やイベント等には参加はしないというところが正直なところではないだろうか。仕事をしていても、また子育ての最中においても協働センターの講座やイベント等に参加しやすいまた参加したいとなることが、基本的な方向性の、誰でも、というところに含まれるのではと考えている。

素案について、読みにくいとの指摘については、情報がばらばらになっていて、QRコードが貼ってあるが、具体的にどうやってというところが難しい仕組みになっていると感じる。概要版はわかりやすく整理されているので、概要版と合わせて修正してもいいのではと思う。

松井委員：

各地域の事業報告から、以前に比べ、地域によっては若者の参加者も増えており嬉しく感じている。社会教育委員になるまで、回覧板はさっと目を通すぐらいであったが、社会教育委員になってから協働センターの講座チラシにもよく目を通すようになった。また学校を通して、子どもが受け取ってくる講座チラシもあり、周知に工夫があることがよくわかった。ただ、地域によっては、子どもにまで情報が届いていないところもあるため、改善の余地はあると思う。また、保護者を通じて子どもへの情報提供も重要になってくるのではないかと。この点も意識して、今後も情報提供に取り組んでいただけると有難い。

小学生を対象とした講座に大学生が講師として参加する講座が増えてきたことはとてもよいと感じる。中学生を対象とする講座についても今後検討の余地はあると思う。特に子どもから若者世代に対しては、周知の方法としてSNSの活用が有効であると思うので、検討してほしい。また、大学生だけではなく、専門学校の生徒も講師となるような事業があれば、専門的なことを地域に還元できるのではないだろうか。

山本委員長：

素案について、「はじめに」のページの体裁について、「・」で箇条書きになっているが、このようにした意図はあるか。

事務局：

文章を分割した方が読み手に伝わりやすいのではとの意図からである。

山本委員長：

現在の大綱では、「はじめに」の箇所に市長名が入っているが、素案に市長名はない。市長名が入るのであればこのような形ではないのではないか。

2ページの「批判的思考力」という表現が気になった。多面的、多角的等、違う言葉のほうがよいのではないか。3ページに、「能力が養われる」との表現があるが、力は培うものではないか。5ページの（5）の人生100年時代のところに「高齢になってからも生かせる時間が増加」とあるが、その次に、シニア層との記載があることから、この部分はなくてもよいのではないか。

事務局：

ご指摘の点について、修正していきたい。

山本委員長：

前回は市長名で出されているので、そこをどのように考えているのか。

事務局：

他都市の事例や本市の計画等を確認したところ、市長名を記載しているもの、冊子の成り立ちや意図を表しているものなど、様々であった。今回については、前回の委員会で示した中間報告骨子案を基に、寄せられた意見を加えて作成したもので、冊子の成り立ちや意図を記載したものである。

今回の改正の趣旨は、前回の改正が平成21年であり、16年ほど経過しているが更新されていないこと、この期間のなかで社会情勢の変化として Society5.0 やDXなど、新しい言葉がどんどん出ていて追いついていなかったことから、基本的な方向性はあまり変えずにマイナーチェンジとして今の時代に合った言葉に変えていくことが最初の趣旨であった。中身や方向性もあまり変わっていないことや、今回は改定に当たっての経過を示したかったことから市長名を抜いたものである。

石田委員：

素案の「はじめに」のページについて、何に対して言いたかったのかわかりにくい。改正の理由を記すのであれば、この分量は必要ないのではないか。「はじめに」ではなく、「改定に当たって」とした方がよいのではないか。

事務局：

「改定に当たって」に変更する方向で対応する。

7. 連絡・報告事項

■事務局から以下の内容について連絡

- ・浜松市と大学との連携事業
- ・令和7年度生涯学習人財育成事業
- ・生涯学習推進大綱パブリックコメント実施 10～11月に実施予定
- ・次回、社会教育委員会開催予定 第2回：令和7年10月開催予定

8. 閉会